

佐那河内村の伝説

史学班 (徳島史学会)

西田 素康^{*1} 湯浅 安夫^{*2}

1. 佐那河内村の伝説の背景

佐那河内村は北は徳島市、神山町、東は徳島市、南は勝浦郡、西は神山町に境を接し東西に長く、南北に短い地形である。旭ヶ丸に源を發する園瀬川には嵯峨川、音羽川などが流れ込みその流域に集落が發達している。標高1019メートルの旭ヶ丸山山麓には放牧で有名な大川原高原があり、それらの高原を含んだ山地が村の面積の約80%を占めている山村である。気候は温暖で、山紫水明の地は多くの観光客が訪れ、特産物もあり豊かな村であって、徳島市にも近く、本県の他の山村のように過疎に悩まされることはなさそうである。

村の歴史は古く、下字根郷^{ねごう}には古墳が残されていて、古代から開拓されていたようである。古い時代は、阿波の国は粟の国と長の国に分かれていたが、大化元年(645)に二つの国が合併して阿波の国になった。合併前、佐那河内村は長の国に属し、佐那^{さなのあがた}県といわれていた。長の国の^{くにのみやつこ}国造の^{からせのすくね}韓背足尼が佐那河内に住んで長の国を支配し、祖先の神、^{みまつひ}観間都比呂^{こいろどのみこと}色止命を祭ったのが、^{みまつひ}観間都比呂^{こじんじゃ}神社といわれている。佐那河内村は長の国の海岸と山間部の中間の^{かなめ}要に位置していた。その後の佐那河内村は、村内各地にある板碑や、特に戦国時代には豪族の活躍を物語る城跡等が歴史の古さを伝え残している。

2. 佐那河内村の伝説の分類と一覧表

前述のような自然環境や歴史を背景として、多くの伝説や昔話が語り継がれてきている。それらは

『佐那河内村史』(A)、『名東郡史(続編)』(B)、ふるさと創生事業の一つとして昭和54年と平成4年に出版された『ふるさと佐那河内』(C)、等にたくさん集められている。それらに収集された伝説や、古老の方々からの聞き取り調査から判明した伝説を次のように分類し、一覧表にしてみた(表1)。

3. 佐那河内村の伝説の特色

県下での山村伝説の特色としては、滝や淵に関するものが多く、平家の落人が逃れて来たという平家伝説、弘法大師の活躍を伝える弘法伝説がたくさん伝えられている。動物では狸・大蛇・山犬などの伝説が多いようである。

ところが佐那河内村は山村でありながら、弘法伝説や平家伝説が少ないようである。四国霊場札所が近くにないので弘法伝説は少ないようだが、平家伝説の少ないのはどうしてであろうか。平家伝説は山深い地に多い。三好郡や那賀郡の山村、祖谷は全国的に有名である。平家伝説は「われわれはこんな奥地に住んでいるが、先祖はこんな貴い一族の出である」という思いから生み出されたものといわれる。佐那河内村は山村といってもそう深くなく、その位置が国の中心に近いので、昔から山村という意識が希薄であった。前記のように、佐那河内村は長の国の中心であったという歴史的要因もあって、平家伝説などが生まれることはなかったのであろうか。むしろ佐那河内の住民はそこに住んでいることに誇りをもって生きてきたといえるようである。そのことにも関連して開発領主である豪族の目覚ましい活躍に

*1 鳴門市撫養町立岩字七枚124

*2 徳島市住吉1丁目9-29

表1 佐那河内の伝説一覧表

人物に関するもの (13)	佐那の長者(C) 野田内蔵助(C) 東条関兵衛と佐衛門尉(C) 名医蓬仙(吉野清次郎さん談) 鉄復堂(C) 大岩筆太(A) 竜王鍛冶(C) 鍛冶の安芸作之(C) 徳円上人(C) 安芸左京進(A) 神官井開伊予守充長(C) 馬場の長はん(C) 鉄砲の名人貞はん(C)
動物に関するもの (5)	お紋の墓(C) ガラガラと牛の爪跡(C) 作物荒らしの鶴(C) 熊の森の言い伝え(C) 山犬を飼う(加藤清さん談)
木や石に関するもの (7)	物見石(A) お神酒松(A) 藤の森の大杉(C) 植松峠の大杉(C) 徳円寺の天狗松(C) 桜のたたり(安芸守さん談) 田野々山の野ばら(C)
社寺・神仏に関するもの (18)	杖立(B) 中辺七塔(B) 養楽寺跡(B) 中山谷口不動(B) 藍神様(B) 仁井田の板碑(C) 法華経板碑(C) 楡伽大権現(C) 天一神社の伝説(佐々木幹雄さん談) 祠のたたり(C) 夜泣き地藏(C) こづき地藏(C) 北向き地藏(C) 花折さん(C) 牛小屋の三社さん(C) 栗見坂六社(C) 六部の墓(C) 石敢当(C)
旧家に関するもの (4)	弓折の佐々木家(佐々木幹雄さん談) 開発に尽くした安芸家(A) 大庄屋小川家(C) 神職井開家(C)
地名に関するもの (3)	一の瀬(A) 塔の原とじゃこう湖(A) 御所橋(B)
水に関するもの (4)	祈雨滝(A) 鯉の湖の話(A) 塔の湖(C) 城ガ湖(C)
妖怪・変化に関するもの (11)	ちじり谷の首切れ馬(A) 疫癘鬼と大岡(A) 大田の狸(A) 杉の宮のやけ火箸(A) 千田裏の小豆洗い(A) 高入道(A) 狸街道(安芸守さん談) 天狗に化ける(加藤清さん談) 首切れ馬(加藤清さん談) 落合橋の狸(吉野清次郎さん談) 南浦の土橋の狸(加藤清さん談)
その他のもの (8)	野田城跡(A) 尾境城跡(A) 実盛塚(A) 根郷の古墳(A) 日露戦争の砲弾(A) 神隠し(中原トラノさん談) 殿川内通い(B) 嵯峨三反蔵(B)

関する伝説が多い。小さな山村にいくつの城跡が残されているのはそれを物語っている。更に佐那河内村には山村に多い狸や山犬などの伝説はあるが、何故か大蛇の伝説は殆ど聞かないのも特色といえる。前記の一覧表のように伝説の総数は70くらいで、これは他の山村に比べてそう多くない。まだまだ研究の余地はあるようである。

次にその伝説のうち実際に語っていただいた話の幾つかを紹介したい。

4. 伝説の紹介

1) 名医蓬仙

下字寺谷の吉野家は400年間、10数代にわたり行者をつとめた家系である。そのなかに八代蓬仙は権大僧都の法階位を持っていた。この人は、仏道のほかに医術を修め、特に内科と産科に造詣が深く、村



写真1 蓬仙使用の薬研

内はもとより徳島方面でも有名となり、蜂須賀公にも信頼され、徳島城内や家老上級武士の家々に入出入りするほどになった。あるとき、城内で蜂須賀家老の奥方が産気をもよおされ、侍医の付き添いで出産になったが意外に重く、産むことが出来ず城内大騒ぎになった、四方八方手をつくして名医を探しているとき、たまたま「佐那河内に名医蓬仙あり」の評判を耳にしていた者がいて言上した。早速お召しとなり駕籠が差し向けられ、蓬仙は登城した。身分の高い人への施術なので命がけであったが、見事に出産に成功し、一同大いに感嘆した。そのことがあって、名医蓬仙の名はますます広まり、多くの業績を残したそうである。蓬仙は行をしながら亡くなり、そのとき糸をひっぱって行場と外部の連絡をとりあったという話が吉野家に伝わっている。また蓬仙が使用した薬研が残されており(写真1)、屋敷には多くの薬草が生えているのは、その名残りらしい。(吉野清次郎さん談 83歳)

2) 山犬を飼う

嵯峨の加藤治太郎(加藤清氏の祖父)という人は、変わり者でいたずら好きの人だった。明治初期のはなしであるが、大川(園瀬川)で山犬の子を捕まえて来て飼いだした。山犬の親が子を捜しにやってきて、近所をうろつき吼える。毎晩のように山犬の鳴き声があるので、近所の人にはこわがって、なかには外の便所へよういかなので、家の中へタゴを入れて

そこへ便をする人もでてくる。山犬に牛をかみ殺されへんかと、牛小屋の防備をする人も出てきた。たまりかねた近所の人が大勢で犬を飼うのをやめてくれ、山へ返してくれるよう、治五郎の家へ申し入れをした。さすがの治五郎も折れて、山犬を山へ返した。その後、山犬はこないようになって静かになった。反省した治五郎は迷惑をかけたと村中を謝って回ったそうである。(加藤清さん談 86歳)

3) 桜のたたり

奥野の安芸家の近くに、安芸家の祖先の霊神を祀った「安芸守神社」というのがある。別名「橘神社」ともいわれ、境内の森を「こうへい山」という。

この社の境内に、かなり昔からあった桜の木が横に倒れ掛かった形で伸び、かたわらの道路の上に覆い被さり、下を通る車などが通り難い状態になっていた。誰の目にも「この桜を切りのけたら通りよいのになあ」と思われていたが、神木を切ると祟りがあるといわれていて、誰も手を出せずにいた。昭和30年ごろ、車の荷が高く枝に障るといって、2～3人が何気なくその枝の一本を切ったところ、一年も経たないうちに、地元から三人もの死者がでた。そのことを祟りと決めてしまうことは地元でも半信半疑であったが、それ以後、ここを通る車はどんなに不便しようと、誰も手をつけるものはいなかった。ところが昭和58年、この桜は老朽化していたこともあって、大風を受けて、あっけなく根元1メートルほどを残して折れてしまった。その後、通行がしやすくなったことはいうまでもない。

今はその桜は取り除かれて跡形もない。なおこの安芸守神社の霊神は、安芸家の祖先安芸太郎と弟次郎であり、源平合戦の時、壇ノ浦の戦いに手柄を立てたので有名な人である。

(安芸 守さん談 73歳)

4) 物見石

物見石と呼ばれる大きい岩が、大宮八幡神社の東100メートルの園瀬川の岸にある(写真2)。言い伝えによると昔はこの岩はすぐ側の高さ100メートル足らずの小山の頂上あたりにあったらしいが、いつの時代かこの川岸に落ちたものといわれている。

山頂にあったこの岩の上から、行き交う人々をよく見ることができたようで、時代によっては、よそ



写真2 物見石

ものあるいは敵のいつてくるのを警戒するため、見張りの場所であったのでないかとも言われている。この付近に物見石と呼ぶ地名もある。

(『佐那河内村史』)

5) 天一神社の伝説

下字宮ノ本にある天一神社は嵯峨の奥の^{えぼしだけ}恵穂志嶽の山頂に社があった。天一神社は、昔は天一神宮と呼ばれていたが、宝暦年間(1751～1764)に天日神社と改称、明治維新に天一神社と改称した。祭神は、天照大神である。

むかし、^{えぼしだけ}恵穂志嶽の山頂に社があったとき、社を建替える時期がきたので、村人が相談して建替え工事がはじまった。山頂へ材木を運ぶのは大変であって、けが人も出た。「出来ることなら、御社をどこか平地に移したらのう」とある一人の村人が言い出した。これを聞いた他の村人も「そうできたらいいのう」と皆が言い出し、神主さんに相談した。話を聞いた神主さんは、嵯峨川で身を清め、二人の宮総代を連れて^{えぼしだけ}恵穂志嶽の頂上の社へ行った。着いた時は夜もふけ、満月が輝いていた。神主さんはお社の中に入って、深々と頭を下げ、「神様、お社の建替えに村人は大変苦勞しています。どうか村人のために、平地へお移りくださいますように。」と、恐る恐る申し上げた。すると不思議なことに、お社の奥から「日の出と同時に弓で嵯峨の里に矢をいるべし。その矢が止まりたるところに、社を建てるがよい。」と、おごそかな声でお告げがあった。

宮総代は月明かりをたよりに坂道をかけおりて村人に知らせた。これを聞いた村人は大変喜び、あく日、東の空が白々と明けると、^{えぼしだけ}恵穂志嶽の頂上を

見上げながら、矢が放たれるのを待った。

日の出と同時に矢が放たれた。矢は、大きな弧を描きながらうなり声をたてて落ちてきた。矢は上嵯峨川のほとりに突き刺さった。村人たちの歓声と拍手は嵯峨の山にこだました。そこへ材木が運ばれ、やがて立派なお社が完成した。時に弘仁2年(811)、1200年も昔の話である。

それから誰いうとなく天一神社と呼ぶようになった。境内には、古い歴史を語る杉の大木がそびえ、神秘的な雰囲気を漂わせている。

(佐々木幹雄さん談 81歳)

6) 弓折の佐々木家

神山町^{おろの}鬼籠野に「弓折」という地名のところがある。阿波・土佐・淡路の守護として、白鳥の鳥坂(石井町)に居城していた佐々木経高は、承久の変に天皇方について敗れ自殺、長男の高重も勢田橋で戦死、家臣平岡六郎利清は高重の一子秀経を抱いて、経高の次男高兼と共に逃れて鬼籠野まで来た。敵の追撃はげしく、高兼はもはやこれまでと、携えていた弓矢を折り自殺した。それで地名を「弓折」と呼ばれるようになった。

鬼籠野の「弓折」には佐々木を名乗る家がたくさんある。その一族が佐那河内の嵯峨へ逃れてきたそうで、嵯峨に一軒、中嵯峨に一軒、佐々木家がある。中嵯峨の佐々木悟家では、30年位前に神棚から弓の折れたのが出てきた。その弓は今も神棚に祭られている。嵯峨の佐々木家には弓の折れたのは出てこなかったが、鬼籠野の弓折の話は鬼籠野でなくて佐那河内の話でないかと考えられる。

(佐々木幹雄さん談 81歳)

7) 狸街道

佐那河内村内では、昔はあちこちに狸が出て人を化かしたという話は多い。奥野地区にも狸の話は多く、遠野のたお(峠)など、峠から峠への道は「狸街道」と言われていた。

子供の頃よくお婆さんが語ってくれた話では、婚礼があって嫁入りの行列があると、その後狸が花嫁行列をする。どこそこの嫁さんが来た時は、それは

見事な行列だったと具体的に話をしていた。また、死者が出た時は、昔は土葬をしていたが、葬式の野辺送りは、夕方提灯をつけていったが、狸が真似をして提灯行列をすることがよくあった。しかし狸にいたずらされて被害にあったという話は聞かない。

(安芸 守さん談 73歳)

8) 天狗に化ける

嵯峨に加藤治太郎(加藤清さんの祖父)という人がいて、乱暴者だがユーモラスなところもあった。木こり(樵)を脅しに行くと言って、夜、天狗の面をかぶり天狗の格好をして、天狗笑いをして脅したそうである。横坂峠のお地藏さんのある道では、月に1回くらいは天狗が通るといううわさがたって有名になったが、それは治太郎の化けた天狗であったそうである。

(加藤 清さん談 86歳)

5. 伝説などを語ってくれた人達(敬称略)

安芸 守(昭和2年生)	安喜 哲夫(昭和10年生)
中井 稔行(大正5年生)	松本 万市(大正1年生)
千田 文雄(大正6年生)	加藤 清(大正4年生)
市原スエノ(大正14年生)	佐々木幹雄(大正9年生)
高根 三郎(大正9年生)	中原トラノ(大正3年生)
吉野清次郎(大正7年生)	

文 献

- 名東郡史統編編集委員会(1971):『名東郡史統編』名東郡自治協会。
- 佐那河内村史編集委員会(1967):『佐那河内村史』佐那河内村役場。
- ふるさと佐那河内編集委員会(1992):『ふるさと佐那河内』佐那河内村。
- 佐那河内ふるさとづくり推進協議会:『ふるさと佐那河内』佐那河内村。
- 徳島県老人クラブ連合会編(1988):『阿波の語りべ』徳島県老人クラブ連合会。
- 森本安市編(1988):『阿波民俗採集録』有限会社アイデア。
- 横山春陽著(1980):『阿波伝説集』歴史図書社。
- 藤澤衛彦著(1919):『日本伝説叢書阿波の巻』日本伝説叢書刊行会。
- 福田晃編(1982):『日本伝説大系第十二巻』みずうみ書房。